



TITLE:

経済学会定例研究報告会

AUTHOR(S):

CITATION:

経済学会定例研究報告会. 経済論叢 1966, 97(2): 251-253

ISSUE DATE:

1966-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/133108>

RIGHT:

經濟論叢

第九十七卷 第二號

哀 辭

故吉村達次教授遺影および原稿

国債発行と金融政策	中 谷 実	1
アージュリスの組織理論 (1)	田 杉 競	16
貸借対照表という用語の創出過程	高 寺 貞 男	30
独占価格と生産価格	松 石 勝 彦	51

記 事

吉村教授逝く

追悼文 (池上 惇 林 直道 松井 清)

追憶談 (坂寄俊雄 稻垣 武 原田篤己)

故吉村達次教授略歴・著作目録

昭和四十一年二月

京都大學經濟學會

経済学会定例研究報告会

昭和40年12月2日 午後1～4時 於 法経第7演習室

下記の報告者による報告と研究集会委員および大学院生、熊沢、菊池阿氏を司会者として質疑・討論が行なわれた。出席者33名。

報告者および報告要旨

I 工場制度の発展

—G. C. Allen の金属・機械工業の構造分析を中心にして—

京都大学大学院学生 坂 本 和 一

周知のように、19世紀の最後の3分の1期から20世紀20年代にかけての時期は、一方では「大不況」期をさかいにして独占資本主義が成立し、他方では個別企業においては「科学的管理運動」の進展をとおして新しい資本家的経営管理体系が成立する時期である。そこで、このような資本主義経済の発展が、いったい基礎過程のどのような変化にもとづいているのかということを、工場制度の発展という問題をとおしてみようとしたのが、この報告である。わたしの報告は、G. C. Allen の *The Industrial Development of Birmingham and the Black Country, 1860-1927* を第一に産業構造の展開過程、第二に工場制度の発展段階という二つの視角から紹介する方法をとった。

まず、1860年と1920年の構造を対比した産業構造の展開過程では、製鉄業・金物工業から機械製作工業への産業類型の変化が工場の波及過程を示していること、金物工業が本格的に工場制度段階へ発展するのは1890年代以後のことであることがあきらかにされた。

つぎに、このような工場制度の発展の内容をそれ自体として、もっぱら生産過程の側面からあきらかにした。ここでは問題を (1) 労働過程の性格と (2) 生産管理方法という二つの視角から説明した。まず労働過程の性格の点では工場は、一方では単一の機械体系にもとづく工場から異種の機械体系の結合にもとづく工場へ発展すると同時に、他方では熟練と不熟練の懸隔の大きな技能構造をもつ工場から半熟練を主体とした技能構造をもつ工場へ発展した。さらにこのような機械体系の編成と技能構造の変化にもとづ

いて、工場の生産管理方法は、下請制＝間接雇用制や集团的請負制という形で熟練労働者をととして作業工程＝作業集団を間接的に管理せざるをえない分散的生産管理の段階から、一方では労働者を直接雇用し、他方では職長をととして中央からの指令で作業を管理する集中的生産管理の段階に発展した。こうして、1860年代の工場制度から1920年代の工場制度への発展をあきらかにした。以上が報告の要点である。

Ⅱ 工場生産の発展に伴う労働組合の組織・機能の展開

京都大学助教授 前 川 嘉 一

Ⅰ 工場生産の発展は生産諸力の増大を槓桿として、資本がその生産諸力を自ら規制、把握するための組織的支配体制の確立化を内容とするものであれば、当然資本による賃労働の支配体制の確立を伴う。したがって、

① 技術的变化にもとづく生産諸力の発展が生産組織、賃労働の構造、賃労働の統轄方式をいかに変容することになるか。

② 資本による賃労働の規制、統轄体制の確立化方向に対して、労資の対等的立場を保持するために、従来の組合（クラフト・ユニオン）がそなえていた自律的規制のための組織・機能をどのように変容していったか。

このような視点から工場生産の発展に伴う労働組合の組織・機能の展開を考えることにしたい。

Ⅱ 技術的变化に伴う生産方式、組織構造の発展、賃労働の変化

技術発展によって、① jobbing type of production→② batch production→③ mass production となり、分業体制の未確立（したがって general shop）から工程の専門化、そしてその基礎にもとづく統合化に向い、機械の変化、工程内容の変化から trade は job に分解することになる。

この熟練の分解によって生産過程の中心的担い手としての基幹労働力も一般的にはいわゆる skilled trademen より operative に、すなわち semi-skilled worker に移行する。かくして、従来の熟練労働者を頂点とする労働者階層秩序も変らざるを得なくなる。

Ⅲ 資本による労働市場統轄と労働条件の規制

従来、熟練労働者が自ら職能別労働市場を地域的に形成して自律体制をもっていたものが、熟練の分解によって、個別資本が不熟練、半熟練労働者を直轄する方向をとるに及んで、労働市場把握をめぐる労資の対抗が生ずる。同じように、賃金をはじめとする

労働諸条件についても、職能別組合による自律的規制は、資本の生産力に対応する直接的規制を確立する方向がとられるに及んでこれまた労資対抗の焦点とならざるをえない。このような条件のもとで労働組合の組織・機能の再編が問題となってくる。

IV 労働組合の組織・機能の変容

労働組合の組織・機能の検討は現実に対応できないクラフト・ユニオンの組織・機能の非効果な諸点とその発展方向の検討となる。すなわち産業別全員組織と再編と全国的な産業別交渉機能が、対資本の上から、賃労働者諸階層の秩序を再確立する上から課題となる。